うおおおおおおおおおお！！

亜田透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うおおおおおおおおお！！

【Ｎコード】

Ｎ６６６０Ｆ

【作者名】

亜田透

【あらすじ】

アクセスありがとうございます♪亜田遙（１８）小説家志望！ファミマ勤務！フリーター！私小説＋ロック＋関西アンダーグラウンド＋ミステリー＋適当文学批評＝ハイテンションスーパーハッピーストーリー♪♪♪

□はじめに

◆一瞬でもこの小説を目にしようかと思った方々に、はじめに言っておきたいこと◆

はじめまして。亜田透です。ライトノベル小説家志望の未熟者です。アクセスありがとうございます。

いきなりですが、この小説を読んでいただくにあたって、言っておかなければならないことがあります。

それは、この小説は、正確にはぼくの書いたものではないということです。

なんだって？　ってお思いでしょうから、できる限り簡単に説明します……

ある日ぼくは、マイシスター（彼女も小説家志望……）の部屋で、彼女の書いた小説を発見しました。……実のシスターの部屋で何してんだという突っ込みは……その……マイシスターとはここ数年連絡が取れない状態だったので、別に、勝手に部屋入っても、その、そこは、まぁ、いいではないですか。

その小説の内容は、妹の私小説（？）でした。妹は私小説家、純文学家を目指していたのです。多分。

小説の原稿の脇には、メモが添えられていました。原文のままここに載せます。

『兄ちゃんへ送る遙の新作！　とくと読め！　元気か？　彼女できたか？　ああ！　ごめん！　私まだ失踪し続けるから！　でもラブ！　でもハッピー！　アイラブユー　バーイ遙　うおおおおおおおおお！！』

ちなみに兄ちゃんはアニちゃんと読みます。妹属性の野郎どもうらやましいだろォ！

……すいません。

ええと話がちょっと逸れましたね……。

つまりは、これはマイシスターがぼくに当てた、新作の小説らしいのです。

新作も何も、僕はマイシスターの他の小説を読んだことはないのですが……。

ぼくは、なんとなくこの小説を面白いなと思ったので、ネットに投稿してみることにしました。

だからこれからこの小説を読んでみよっかな？　と思っている方は、これはぼくが書いたものではなく、ぼくのシスターが書いたものなのだということを頭に入れておいてほしいのです。

マイシスターの書いた文をぼくがパソコンに打ち込み、その文を読むということはなんだかややこしくて違和感を覚えるかもしれません。それにぼく自身まだ最後まで読んでいないので、もしかしたら「これ以上は赤っ恥なので無理！」と思って止めるかもしれませんし、むしろ途中からぼくの勝手な創作やツッコミが入ったりするかもしれません……

！　あ、そうだ！　こうします！

※※※

タイトルの四角が■ならその話は本文（つまりマイシスターの私小説）、白い□ならぼくからのメッセージです。

たとえば今回は白の□なので、これは本文とはまったく関係のない、ぼくからのメッセージ（お知らせ）です♪

※※※

さて！　ちょっとややこしいですが、それでは、どうか最後までお付き合いいただきますよう、よろしくお願いいたします。

ちなみにタイトルはぼくが勝手に付けました。

亜田透

■亜田遙、軽やかに爆誕

【Ｃａｓｅ．１　死んでるかの子（Ｔｈｅ　ｃｏｒｐｓｅ　ｏｆ　ｋａｎｏｋｏ）】

とぅるるるる♪とぅるるるる♪

がちゃ。

「もやしもやし」

「……おい……遙かよ……」

オオウ。バレた。

「よく分かったねー。ははん君さては明智君だなー？　そうなんだろー？　もしくはあれか？　バーロー？　バーローでしょ？　ああそうだねははははきっとそ」

「黙れ。なんでお前が電話に出るんだよ？　っていうかなんでお前がかの子ん家にいる？　かの子に代わってくれ」

おー怖。

「かの子ちゃんいないよ。なんかねー、四十九日だって」

「いいから代われ。電話越しにブン殴るぞ」

「えぇ！？　マジで！？　スタンド！？　殴って殴ってぇ！　私をメッタメメタァにしてぇっ♪」

プッ。つーつーつー……

うおお切られたよ。冗談の通じない奴だな。まぁそんなところがカワイイんだけどね。あっははは。

私は受話器を置いた。さて、と。息を吐く。彼からの電話でテンションを上げている場合ではないのだ。そういうつもりは毛頭なかったのだ。本当なのだ。本当に私はこの事件を解決したいと心の底から思っているのだ。彼にふくしゅげふげふ、リベンげふげふ、ハンムラビほげふげふ、恩返ししたいのだ。

私は例の部屋の扉を開ける。むわぁ～んと血の匂い、性格には鉄

分のヤな匂いが嗅覚を刺激する。散らかっているゴミを蹴飛ばし、ソレに近づく。そこで、一句。
「だって死、んでるんですもん、かの子ちゃん」
【亜田遙、軽やかに爆誕！（Ｈａｒｕｋａ　Ａｄａ，　ｓｈｅ　ｓｈｏｕｌｄ　ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｃｒａｚｙ　ｈｏｕｓｅ！）】
万物は流転する。誰が言った？　ソクラテス？　クレイステネス？　プトレマイオス？　ハハハ知ってるよ。冗談だよ。私世界史好きだからね。プラトンでしょ。ウハ。ウハハハハ。
ハ……
あああああああああ！　足りない！　足りないよＭＡＯＩ！
ＭＡＯＩ足りないっっっ！　おちゃっ！　おちゃああ！
……なんのこっちゃ、ってね。
いや、ごめん……。引かないでくれるかい。
私、亜田遙！　生まれてこの方十八年間も生きてきた女！
職業はアマチュア小説家だ。そんでもって副業というか人生の経験のためにコンビニ店員やっとります。二年目っす。
特にこれといって趣味も特技もないわけだけど、まず始めに言っておきたいことがある。
そう、それは、私はウザかったということである！
ＹＥＳ！　だが待て！　待ってくれ！　よく見てくれ！　ウザかったのだ。過去形だ。つまり今はウザくない。私はある出来事を経て、精神的にも肉体的にも一回り成長したのだ……
高校一年生のとき、つまり今から四年前。私は大好きだった夏野くんにあっけなくフラれ、死ぬほど傷ついた。だってフラれたことなんてなかったのだ。というか初恋だったから。多分、大好きな初恋の人に告白してフラれたことがある人は、分かってくれるだろうね……。
私は満持で（亜田辞典……満持：亜田の麻雀仲間がよく使うスラ

ング。満を持しての略。発案者亜田）、女の子らしく可愛くラッピングした手紙を彼の下駄箱に忍ばせて彼を体育館裏へ呼び出すことに成功した。

生まれて始めての告白は、緊張した。だけどそれ以上に、あれ？　こんなもんでいいのか？　的な、あっけなさがあった。それでも私は全力を尽くして、彼に自分の思いを伝えた。どんな小説のラストよりも、感動のシーンであったことだろう……

そのときの彼の返事を、私は一字一句正確に覚えている。

「ごめん、お前と付き合うの無理。っていうか友達として付き合うのも無理。お願いします。もう俺とは関わらないで、一生他人のままでいてください」

ガーン！　たしかに私嫌われてるなーって思ってた。うん思ってた。だってその頃私ウザかったもん。自分で分かっててウザい人生送ってた。ははは。でも相手もさ、何もそこまで言わんくてもって感じはするけど。ねぇ？

とそんなことがあり、フラれた次の日、私は南アメリカに行った。……一人で。もしかしたら付き合えるかもって思ってたのだ！　だから二人分予約してあったのだ！　しかし初デート旅行が傷心旅行にすり替わってしまった。チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ、ボリビア、ペルー……。あぁ！　どれだけ魅力的な国で、魅力的な町で、魅力的な人に触れても、私の心が癒されることはなかった……

次で最後の国にしよう。そうして訪れたブラジル。そこで出会ったアマゾンの先住民族に、私は人生を変えられた。

ブラジル編を書いたほうがいい？　いや、いいか。詳しく知りたい人はｗｉｋｉってくれれば……

まぁとにかくなんやかんやで私は、シャーマンの元で精神修練することになった。

辛かった……現地の人たちは「どんな人でも受け入れます」的な、ウサンクサイ新興宗教っぽいスタンスだった。だけど彼らには一万

年以上の歴史があり、彼らの文化は、アメリカから合法的に保護されていた。彼らは私に手取り足取り、いろいろと教えてくれた。

食べ物はバナナと水おんりー。呼吸法、気孔、祈り、断食、瞑想……。数ヶ月間ブラジルの奥地でそういった状況下で過ごし、シャーマンにとって必須な作法や技法を学んだ。途中で三途の川（やはり私は仏教徒の血が流れているのか）を実際に見た（アマゾン川だったかもしれない）。

私は結局一人前のシャーマンになることはできなかったけれど、熱心だったし、若かったこともあって先住民族たちに可愛がられた。

そこで私は、アヤワスカという木から取れるチョーまずい、だが彼らにとっては聖なる飲み物であるというアヤワスカ茶を飲ませてもらった。

覚悟していたがオチャは死ぬほどまずく、胃の中にその液体が入った瞬間、私はゲロった。シャーマン的にはこれを浄化というらしい。ジャングルの奥地。ログハウスみたいな建物の中で、ボロボロの布をまとったシャーマンたちが、チョーハッピーな顔して踊っている。太鼓を叩いたりして楽しそうだ。一方私はゲロを吐いている。お椀に茶が注がれる。シャーマンたちは歌を歌う。ハッピーな歌だ。私はゲロを吐いた。シャーマンたちは茶を注ぐ。そしてハッピーな叫び声を上げる。雄たけびと言ってもいいかもしれない。私は吐く。

だけどついに、ついに来た。三回目にお茶を胃の中へ入れたときだった。

世界がぐるんと一回転した。自分の目が何個もある感じ。自分の意識がたくさんある感じ。空から下界を見渡している感じ。

そうだこれがハッピーだ！　これがシャーマンにとってのハッピー！　そして一万年以上に及ぶ歴史を持つ全人類にとって共通のハッピーなんだ！

私は立ち上がった。だけれど、体は立ち上がっていなかった。シャーマンがお茶を注ぐ。お茶を注ぐ。注ぐ。注あれ？　私はいつの間にかトイレの前に立っていた。私はトイレで吐いた。だけれどそ

の瞬間だった！

うおおおおおおおおおお！！　ハッピィィィィィィィィィィィィィィィ！！　とんでもなくハッピーなのだ！　脳の開放！　精神の解放！　セイシンノカイホウ！　セイシンノホウカイ！　百万個ある意識が一兆個に分裂してＭＡＯＩやＤＭＴが私を一気に空中へと投げ出して、その瞬間私は知った。

世界は、とんえもらく、ハッピーやラブといった感情に包まれていて、それが世界を支配しているのだと。

私にとっての初めての変性意識状態。

万物は、何物でもない！　そこに存在するのはハッピーアンドラブ、それから亜田遙だけなんだ！！

私はその日からウザくなくなった。相変わらず友達はできなかったけど、ウザがられることはなくなった！！

【亜田遙の日常（Ｔｈｅ　ｎｉｃｈｉ－ｊｏ　ｏｆ　Ｈａｒｕｋ　Ａｄａ）】

さて、今日である……。八月二日、今日。

もはや第二の故郷となったブラジルへの四度目の旅行で、私はまたまた例のオチャを別けてもらって日本に帰国した。

おぉ……東大阪市……。久しぶりだよ……ツタヤインヤエノサト駅……。私は日本にいる限り、毎日ここへ通う。個人的に感銘を受けた舞城王太郎さんの『好き好き大好き超愛してる』を買ったのもここだ……。

思えばあれが舞城さんワールド初体験……。私は柄谷行人さんの影響で、近畿大学で文学批評を学んでいたのだが（嘘）、舞城さんの文章の書き方というか世界観というか、……

暑い。

日本の夏の暑さって、我が第二の故郷ブラジルとはぜんぜん違う

のだ……

なんだかこう、いやらしい暑さなのだ。日本にはなぜか、盗撮や下着フェチとかいった、陰湿極まりない性癖を持つ人が多いと思う。多分それは気候のせいなのだ。なんでこう湿度が高いのじゃ。いやらしい気候が人をいやらしくさせ、そのいやらしさが地球温暖化と銘打たれて全世界で騒がれていると仮定したら……？　ああ！　怖い！　そのうちいやらしさが地球全体を包み込んで、ブラジルのパティスやアニーも日本人みたくいやらしくなってしまうのだろォカァァァァ！

ふむ。なーんて、ほら。いつも通りわけの分からないことを考えていたら家に着いたぞ。

ヤエノサト駅から徒歩十分程にある、家賃五万円のマンションに私は一人暮らししている。オートロックなのだが、怪力で自動ドアに数ミリほどの隙間を開けて、そこにチラシか何かを挟み、自動ドアのセンサーを誤作動させることによって、鍵ナシでも中に入ることができる。いいのか？　ちなみに私は１０５号室に住んでいて、そこは入り口からもっとも近い。もちろん一階なので、陰湿極まりない性癖を持つ人から洗濯物のパンツを盗まれるなんてざらだ。むしろ盗んでくれ。

ポケットから鍵を出して部屋のドアを開ける。私は二ヶ月ぶりにマイルーム臭を嗅ぐ。汚らしくて崇高な匂いである……！　私の部屋は、簡易台所付きで、業務用ゴミ袋が常時二三散在している。服が何十着もそこらへんに放置され、小さなピラミッドを作っている。昔この部屋に泊まりに来た男の子が「ジャージ貸して」と言ってきたので、よっしゃと思い服ピラミッドの中からごそごそとジャージを取り出してその子に渡したら、「……やっぱいい」とすごくヤな顔された。エレキギターやアンプなんかも無造作に置かれている。それからテレビや電子レンジや冷蔵庫なんかも置かれてはいるけど、ノートパソコン以外の電化製品はほとんど使うことがない。

ギターなんて弾けるわけがない……

私はまず家に帰ったら、ノーパソの電源を付ける。
もちろんメールのチェック。
ヤフーにログイン。おお！　新着メール十五件！　一ヶ月で十五件！　私はメールを確認する！
ｉｎｆｏｓｅｅｋ、ｉｎｆｏｓｅｅｋ、ｉｎｆｏｓｅｅｋ、ｉｎｆｏｓｅｅｋ、ｉｎｆｏｓｅｅｋ、ｉｎｆｏｓｅｅｋ、ｉｎｆｏｓｅｅｋ、ｉｎｆｏｓｅｅｋ……
いいのだ。ｉｎｆｏｓｅｅｋは友達なのだ。
私は煙草を吸おうと思う。本当は吸ったこともないくせに、なぜだかたまにそう思う。実際煙草を吸う夢を、何度も見たことがある。
九時から帰国後速攻バイトがあるので、今から二時間何しようかなとも思う。とりあえず某ＳＮＳサイトにログインする。数ヶ月前から始めたこのＳＮＳ。マイミクは六人。六人！　私の日記へのコメント、０件。０件！
他人のしょうもない日記を、私は見ることなく、コミュニティへの新着書き込みに目を通した。私は一番人の多そうなコミュに、新しくトピックを作る。『ブラジルから帰ってきたッス！！！！！』

本文　２００９年０８月０１日　１９：０６

今回四回目の滞在だったわけだけれども、やっぱり最高だったよ！　チョーベリィハッピィ！　いやー飲んだ飲んだ。体感したよ。人体の神秘。
日本だと……多分速攻ムショ行きだもんね？　ウハハハハ！
日本人アワレ！！
まぁ私は精神修練のおかげで、呼吸法や瞑想だけでトリップを味わえるけどね。厳しかったよマジでアレワ！！
っつーかバイトの時間まで暇。しりとりしよう。まいじょうおうたろ『う』

ところで私は小説家志望である。
私が今書き込みしたコミュニティも、そういった人たちが多く集まる。
私が小説家になりたいと思ったのは、ある人の影響なのだ。
それは……知る人ぞ知る流水大説家……清涼院流水さん。
中学二年生のときに清涼院流水さんの『コズミック』、『ジョーカー』を読んで以来、私はあの強烈な世界、ぶっ飛んだストーリーにひどくひどくひどく感動した。……陳腐な感想でごめんなさい！
私は清涼院さんから派生して、いろいろなミステリーを読んだ。そんな私は数ヶ月前まで読み専だったのだけれど、自分でも清涼院さんみたいに良くも悪くも世界を自分ワールドの渦に巻いてやりたいと思い、小説を書き出した。小説の内容……？　黒歴史だけど気が向いたら公開しようかな……。
ところで清涼院さんの世界は、ボアダムスと通じていると思う。
ボアダムスについてはめんどくさいのでまた後で書こうと思う……。
とにかくボアダムスのリーダー山塚アイさんは、キョウト出身だし、彼の作り出す音楽や映像や絵は、ジャンルや方向性は違えど、清涼院さんと根本的に似通っている部分があると思う。北京オリンピックの開会式にも通じるところがあると思う。
清涼院さんとボアダムス……
私は青春時代、この二人のアーティストに傾倒していた……（青春時代編もあとで書こう）
！　ピキーン！　コミュニティに返答アリ！
っつーかバイトの時間まで暇。しりとりしよう。まいじょうおうたろ『う』
１　２００９年０８月０１日　１９：０７
『う』せろ

というわけで亜田遙、青春時代編はじまりデース……（ぱちぱち）

【亜田遙　～青春時代編～（Ｔｈｅ　ｙｏｕｔｈｆｕｌ　ｄａｙｓ　ｏｆ　Ｈａｒｕｋａ　Ａｄａ）】

スカート、揺れる……ふわり……

私はいわゆる「ながら読み」というのが好きだ……

音楽聞きながら読書、ゴハンを食べながら読書、満員電車に揺られながら読書……最終的には読書しながらの読書……

「行儀悪い！」と人からは言われる。だけれど、我思うに、人間という生き物は、別々の処理を同時に行うよう義務付けられているのだ。

頭の中ではまったく別のこと考えているのに、私たちはフツーに言葉を理解できる。歯を磨ける。自転車を漕げる。人とトーキングできる。

人と動物の違いはそこなのだ。

視覚嗅覚味覚知覚触覚すべて同時に、なおかつ別々の情報を、人間の脳は一瞬で受容する。歴史的に見ても、いっぺんのことを同時に行えるよう進化してきたはずなのだ……産業革命など（私は世界史が好きだ）……

だから私は人に注意されても、ナニナニしながナニナニする。

中学二年生の私。私はスカートの中を盗撮されながら読書をしていた。

たまにいるだろう。妙にハゲ散らかしていて、もう性欲ムンムンで、人間っていうよりも動物に近いような、脳が衰えまくって欲望と欲求の区別すら付かなさそうな、そんなオッサンが。

オッサンは堂々と私のスカートの中を、カメラでパシャパシャ撮っているのだ。

パシャパシャパシャ……。パラパラパラ……。オッサンのカメラ

音と、私がページをめくる音が、シンクロする……
オッサンの頭の中は、私のパンツで埋め尽くされていることだろう。私の頭の中は、九十九十九に埋め尽くされている。
私はそのとき、ボアダムスを聞いていた。すると――
「何してんだよおっさん」
誰かの声がした。
私が振り向くと同時に、オッサンは地面に倒れた。オッサンのカメラは地面に落ちて壊れた。
ひっ……と情けなく息を漏らすオッサン。「盗撮か？　ダサいことしてんじゃねぇ！」オッサンの前に立つ、その声の主。私よりも少し年上だろうか？　制服を着ている。少年はオッサンを蹴り倒し、馬乗りになってボコボコにした。
「大丈夫か？」
オッサンをバタンキューさせた少年は、私に精悍な声でそう聞いたのだ……
「ここ不審者多いからな。気をつけろよ。じゃあな」
そう言って走り去っていった。私の頭の中は、その少年に埋め尽くされた……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6660f/

うおおおおおおおおおお！！

2010年10月28日08時25分発行